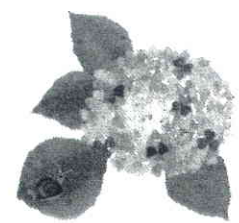
この翻訳・刊行が公正な論議のたたき台になることを期待する。

二〇一一年三月七日

朝鮮高校への税金投入に反対する専門家の会

代表　萩原　遼



〈凡例〉

朝鮮中級学校『朝鮮歴史』は、中級2が一〇〇ページ。中級3が一二八ページ。中級1というのはなく、歴史の学習は中級2から始まる。中級2の第一章から第六章までは翻訳を省略した。（その目次は以下である。第一章、わが国の歴史の始まり。第二章、三国の成立と発展。第三章、渤海と後期朝鮮。第四章、統一国家高麗。第五章、朝鮮王朝の成立と発展。第六章、朝鮮封建社会の変化）。

中級2の第七章から第九章までを『朝鮮歴史』中級3と合わせて一冊にした。これらの措置は、古代史から近世までを省略し、もっとも歪曲されている現代史の部分を浮き上がらせるためである。

原書の発行：「学友書房」（東京・板橋区）

編纂者：「総連中央常任委員会教科書編纂委員会」

甲第29号証の3

朝鮮中級学校『朝鮮歴史』を読む

民生団 抗日戦争の連合赤軍事件

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会 代表　三浦　小太郎

金正日は白頭山で生まれた？

朝鮮中級学校の、二年生および三年生用の歴史教科書が〝星への歩み出版〟から発行された。私は、朝鮮高校のすでに出版された一、二、三年生用の教科書はすべて読ませていただいたが、「読書の苦しみ」と言うものをこれほどまでに味わったことはない。朝鮮戦争を引き起こし、恐怖の収容所体制を敷き、拉致をはじめとするさまざまなテロ行為を行った金日成、金正日を朝鮮史上もっとも偉大な人物として礼賛する本を三冊も読むというのは膨大な精神的苦痛をともなうのが当然である。

そして、このたび翻訳された『朝鮮歴史2・3』の内容もおおむね同様の金日成礼賛だが、多感な中学二年、三年の時期を、生徒たちは日韓併合前後から抗日戦争、そして第二次大戦の終結と朝鮮の「解放」を学ぶこととなっている。その内容は他の論者も触れることと思うが、これまたトンデモ史観としかいいようがないものとなっている。

私がちょっと笑ってしまったのは「敬愛する将軍様の誕生」（一三二ページ）の記述だ。すでに金正日がロシアで生まれたことはおおよそ北朝鮮に関心がある人なら皆知っている事実だと思うのだが、この教科書では白頭山で生まれたことになっている。

「日帝との最後の決戦のための準備が着々と推進されていた時期の一九四二年二月十六日、敬愛する金正日将軍様におかれては白頭山密営で誕生された。朝鮮人民革命軍の隊員たちは、「ああ、朝鮮よ！　同胞たちよ！　白頭光明星の誕生をここに知らせる！」「二千万同胞よ！　白頭山に白頭光明星が独立天出竜馬に乗って出現し

た！』などの文字を彫りこみ、将軍様の誕生を知らせた。…（中略）…パルチザンの息子として生まれ、銃煙のしみついた服を着て、突撃の号令とともに成長された将軍様におかれては、世界でいちばん正義であり固い信念をもった闘士たちのなかで、生活の真理を学びながら力強くお育ちなされた」

このような大仰な文章で金正日をたたえ、朝鮮民族の愛する白頭山で生まれたと説き続けるのは、あの聖なる山への冒涜である。だいたい木に彫りこむとかは自然破壊ではないか。以前にも書いたことではあるが、歴史観はさまざまでいいし、教育内容には干渉しないという方々は、スターリンやヒトラーの生誕を同じように讃える教科書を許容するのだろうか。

さらに言えば、本書には日本植民地下では、朝鮮半島で資源の搾取、酷い弾圧と強制連行がおこなわれたと書いてある。日本への強制連行一五二万名、「慰安婦」二〇万名、そのほかを含め、一九三七年から四五年までにさまざまな形で国内外に強制徴発された朝鮮人の数は八四〇万人としている。（一〇四ページ）この記述はあまりにも極端な「反日教育」である。二度と植民地などにはならないという決意を教えるのは当然だが、もうすこしバランスの取れた記述も必要だろう。

金日成とパルチザン幻想
真の抗日英雄 金光瑞の闘い

金日成研究の古典的名著『金日成は四人いた』（ワニ文庫）には、著者、李命英氏のきわめて印象的なエピソードではじまっている。

李氏が日本植民地下で中学二年生を迎え、その成績表を父親に見せたときのことである。父は絶句してうなだれてしまった。成績ではない、李氏の視力が〇・三、〇・四といわゆる近視だったからだ。父親は、息子を日本の陸軍士官学校に入学させたかったのだが、この視力では受験もできない。父親は、妻に命じて、たんすの奥から韓国の国旗を取り出させ、息子にこういったという。

「これは大極旗という。私たちの国の旗だ。私たちの国が他国に支配されたのは、私たちがそれに抗する武力をもっていなかったからだ。私がお前を日本の陸軍士官学校に入れたかったのは、ほかでもない。お前にそこで軍事を学ばせたあと、海外で独立運動を続けている多くの同胞たちのもとにやって、私たちの国を解放してほしかったんだよ。」

「今、満州地方の険阻な山中にあって、キム・イルソン将軍が祖国独立のために身を賭して戦ってくださっている。キム・イルソン将軍は日本陸軍士官学校騎兵科出身のお方で、早くから満州に亡命し、武装抗日闘争の先頭に立つもっとも優れた愛国闘士だ。私はお前に、将軍の元にはせ参じて、ともに独立闘争を戦ってほしかったんだよ。」（『金日成は四人いた』）

この国旗は、三・一事件のときに父親自らがデモの先頭に立ってうち振ったものだった。

しかし一九四五年、父の憧れの「キム・イルソン」将軍が平壌に姿を現わしたときに、その写真が新聞に掲載されたとき、父親はふたたび失望を味わうことになった。写真を見た父親は言下に断じたのだ。「こいつは偽者だ、キム・イルソン将軍が、こんなに若いはずがない」。

日本の陸軍士官学校騎兵科を卒業した金光瑞。李命英氏が執念で発掘した写真

この父親が憧れていた「金日成」は、李氏の緻密な調査により、たしかに日本の陸軍士官学校を卒業した金光瑞のことであることが判明している。彼は一九一一年に日本士官学校騎兵科を卒業し、一九年に満州にわたって抗日戦争に参加した。

武器調達のためにソ連に越境した金光瑞は、そこで朝鮮人の青年を集め、ソ連軍とも協力して独自の六〇〇名ほどの部隊を編成、シベリア出兵（編集部注：一九一八―一九二二年）の日本軍や白軍と戦った。士官学校で学んだ知識を活用し、青年たちの教育にも力を注いだ。そして一九二三年には、東亜日報の独占インタビューにも応じている。李命英氏の紹介するその記事は文章としても美しく、彼の精神の高貴さを伝えている。ここで彼が、白馬に乗って指揮を執ったと発言したことが、「白馬に乗る金日成将軍」のイメージとなったと李氏は記す。

しかし、日本軍がシベリアから撤退した後は、ソ連にとってむしろこの武装部隊は邪魔者となった。日本との

交渉や国交樹立のためにも、ソ連国内で事実上の抗日独立軍の存在を許すはずはない。金光瑞は上海の韓国亡命政府の大会も訪れたが、空理空論と分裂を繰り返す亡命政府に失望、シベリアで兵士を屯田兵として働かせながら、なんとか将来の展望を開こうとした。しかし、一九二五年以後、その消息は途絶えている。現在のところ、スターリンの粛清の犠牲となり、収容所で第二次世界大戦中に死んだという説が有力だ。

この「金日成」こそ、真の意味で独立運動の英雄と呼ぶにふさわしい。彼の抗日運動は結局ソ連に利用され、見捨てられ、彼自身も粛清された。しかし、おそらく彼は最後まで、東亜日報で述べた自らの詩に託した祖国への思いを忘れることはなかったはずだ。

浮雲さまよう シベリアの大地
剣をついて 独り たたずみ
白い峯峯の彼方を 眺むれば
愛する無窮花は かすみ

（李命英「金日成は四人いた」より）

民生団事件を解決した金日成？

金光瑞の悲劇は、ソ連、とくにスターリン体制の粛清の本質を見抜けなかったことだろう。しかし、いまの時代から彼のソ連への判断の甘さを指摘するのは後知恵としかいえまい。ロシア革命当時からスターリンの正体が明らかになるまで、ソ連は「労働者の祖国」と言う希望のシンボルだったのだ。そして何よりも武装闘争と抗日戦争をめざす金光瑞にとって、ソ連はその出撃基地であり、武器を求めるために利用できるはずだった。実際金光瑞はソ連でも当初は軍人として歓迎され、軍事教育にも参加している。ソ連にとっても価値ある人物だったのだ。たんに傀儡として一九四五年に連れてこられた金日成とはまったく違うのである。

ここで朝鮮学校中級教科書に戻ろう。ここに書かれた金日成の抗日運動や前半生は、ほとんどが、先の「白頭山で金正日様が誕生された」というレベルでの美化やでっち上げといってよい。そして、この教科書のなかで、抗日戦争の記述はいわゆる「大本営発表」というべき金日成の武勇伝にあり、たんに美辞麗句が並ぶだけである。

それとおなじくらい強調され、かつ金日成の偉大な業績とされているのが、抗日運動内でおきた陰惨な粛清と内ゲバ事件と言うべき、「民生団事件」についての記述である。「民生団事件」について、この教科書がどう教えているか、とりあえず見てみることとしよう。

「抗日武装闘争を武力だけではつぶせないと考えた日帝は、革命隊伍を内部から破壊するために一九三二年二月、民族反逆者と日帝の手先たちで〈民生団〉というスパイ団体を作り出した。」

「日帝は〈民生団〉が解体した後も、革命隊伍と遊撃根拠地のなかに、〈民生団〉組織が根強く残っているかのようなデマを流し続けた。」

「高い地位に着く機会だけを狙っていた排他主義者（編集部訳注＝中国人幹部をさすが、さしさわりを恐れてこのように表現している）たちと宗派主義者（訳注＝分派主義者）たちは、日帝のデマ宣伝にだまされ、自分たちの気に入らない朝鮮の革命家たちを疑い、みだりに逮捕した」。「なんの罪もない二〇〇〇余名の朝鮮の革命家たちが、日帝の〈スパイ〉だとして無念にも虐殺された」。

「敬愛する金日成主席様に置かれては、濡れ衣を着せられ〈民生団〉にされた人びとをお救いくださり、さらにはご自身を謀略で陥れようとしていると疑われていた韓ボンソンと言う隊員までも固く信じ、正しくお導きなされた。こうして排他主義者たちと宗派分子たちが騒いでいた〈民生団〉事件のうそが暴かれはじめた。」

「このようなときの一九三五年二月、汪青県で大荒歳会議が開かれた。会議に参加した人びとは、そのほとんどが反〈民生団〉事件を誤った方向にもっていった排他主義者たちであった。排他主義者たちは会議で、東満にいる朝鮮人の七〇％、朝鮮人革命家の八〇～九〇％は〈民生団〉だと言い」「朝鮮人は少数民族であるから幹部にはなれないし、中国の地で活動する朝鮮の革命家たちが、民族解放のスローガンを掲げるのは間違ったことだと主張した」『朝鮮中級学校 朝鮮歴史2・3』八六～八七ページ）

これに対し、金日成は、処刑されながらも朝鮮独立万歳を叫んでいった彼らがそのような民生団のはずがないと述べ、さらに「国籍とか所属、人口の多数が幹部選抜の基準になってはならず、その人が誰であっても革命に忠実な人を幹部に選抜しなくてはならないと強調され、朝鮮革命の主体的な立場を強く固守された」。

「主席様におかれては十日あまり続いた会議で、単身ではげしい論戦をくり広げられ、排他主義者たちと宗派主義者たちの罪行をひとつひとつ暴露された。大荒厳会議からはじまった反『民生団』闘争の問題と関連した論戦は、三月に開かれた腰営口会議でも続いた。魏拯民をはじめ、会議に参加した多くの人びとが、自分たちの間違いを反省し主席様の主張を支持した。会議では、反『民生団』闘争の問題と朝鮮革命の主体的路線問題を國際党に提起することになった。」（同　八八ページ）

このように、民生団事件を終息、解決したのは金日成だというのがこの教科書の記述である。この事件は、満州における抗日運動を事実上崩壊させかねないほどのものであり、かつ、北朝鮮の歴史上も決して隠蔽できない悲劇の歴史なのだ。だからこそ、この朝鮮人革命家の大量粛清と言う悲劇を解決した功績を金日成に与え、彼を美化しようとしているものと思われる。

民生団事件の真実とは何か
中国人と朝鮮人との対立

では、この民生団事件の実態はどのようなものだったのだろうか。まず前提としておさえておかなければならないのは、当時はソ連のコミンテルンには「一国一党」の原則があり、満州における朝鮮人共産主義者は中国共産党に入党していた。つまり、朝鮮独立運動ではなく、あくまで中国共産党の一部として行動することが求められたのである。

しかし、当時の満州東部ではこの方式は現実にはそぐわなかった。まず、満州国では一九三四年から、東満、つまり従来吉林省に属していた延吉県、汪清県、和龍県、琿春県、安図県を「間島省」と定めていたが、先の間島四県の人口比率は、一九二五年の調査では八〇％を朝鮮人が締めており、中国人は一九％にすぎなかった。共産主義勢力も同様で大多数は朝鮮人だったのである。しかしコミンテルンの指令は、在満朝鮮人共産党員は、中国共産党の統一的指導のもとに、中国革命に直接参加し朝鮮革命は二次的、側面的支援に止めよと言うものだった。

しかも一九三〇年、当時中国共産党は急激なソヴィエト地区建設や武装闘争を掲げる李立三路線の支配下にあり、「地方暴動を発展させ土地革命を行い地方ソヴィエトを樹立せよ」という中国共産党満州省委員会の命令で、この年の五月三十日には「間島五・三〇暴動」というあまりにも無謀な決起を行い多数の犠牲を出す。まさに朝

鮮人共産主義者は、中国共産党に忠節を誓う「血の入党」儀式をおこなったとすらいえよう。だが、少数派の中国人に事実上指導され、朝鮮独立にはかかわれない朝鮮人党員の不満はくすぶっていたと思われる。

このような中、「民生団」が生まれた。この組織は日本が主導して作られたもののようで、一九三二年二月、親日、反共の路線からの「間島自治」を掲げている。それほどの実績もなく五ヶ月ほどで解散したのだが、この短命な組織が、日本の想像以上の分裂と内ゲバを抗日運動にもたらすことになったのだ。

一九三二年十一月、宋という党員が、日本のスパイだという嫌疑をかけられた（抗日パルチザンが拉致した日本憲兵がそう語ったのだ）。彼は取り調べの過程で、二〇余人の名前をあげ、党は充分な調査もせずに彼らを逮捕、処刑してしまった。拷問による強制的な自白だったと思われる。

この背後には、姜在彦氏の著作『金日成神話の歴史的検証　抗日パルチザンの「虚」と「実」』によれば、次のような民族対立があったものとされる。まず、朝鮮人側には多数派の自分たちが少数派の中国人党員に支配、指導されることへの不満があった。また中国人の側は、朝鮮人が日本軍の力を借りて中国領土である間島で勢力を拡大し自治権を強めることへの不信感があり、民生団事件はその民族感情に火をつけた。本来民族主義を乗り越えたつもりの共産主義運動のなかに、むしろ歪んだ民族主義が現われてきたのである。

さらにいえば、東満に流入してきた朝鮮半島からの多量の移住民（当時は日本国民）が、中国民衆からはある種日本軍に守られた侵入者とみられたという民族感情もあった。一九三一年の万宝山事件はその象徴である。この年七月、満州内陸の万宝山の朝鮮人農民を、中国人農民が襲撃、さらに日本側警察とも衝突した事件だ。この事件を契機に朝鮮半島で中国人排斥の暴動が発生している。この事件の仔細な経過には触れないが、民族感情のむずかしさを痛感する。

民生団事件は疑心暗鬼を生み、殺しあいをもたらした。中国共産党東満委員会は、「民生団、韓国民族主義者、派閥主義者は日本の走狗である」と規定し、朝鮮人幹部を利用して反「民生団」闘争、いや粛清の前面に立たせた。

二例ほど紹介する。一九三三年七月、中国共産党から派遣された巡視員、藩慶由が、朝鮮人幹部に「民生団」

の嫌疑をかけ、中国人と入れ替え、さらに査問にかけるよう指示した。琿春県で軍事委員を務めていた朴斗南も、ピストルを取り上げられ役職を解任された。身の危険を感じた朴は警備員の銃を奪って藩を射殺し、日本側に投降してその後は反共運動に従事したという。共産党東満特別委員会は今度は組織部長李相黙（朝鮮人）を派遣、同県幹部六〇名を逮捕、半分の三〇名を処刑した。なお、革命陣営内の約七割は民生団であり、朝鮮人を幹部に登用すべきではないという、朝鮮中級学校教科書でもそれに近い発言が触れられている人物は、中国共産党中央が派遣した東満特別委員会の秘書長、曹亜範である。

また、一九三五年一月、日本側がかって民生団を作った金東漢が会長をつとめる「間島協助会」の活動がみごと成功する。三四年十一月、中国共産党東満特別委員会は民生団問題についての会合をもったが、朝鮮人党員の李相黙、朱鎮は参加を許されなかった。この情報をえた金東漢は、朝鮮人党員韓英浩が食料調達のために移動していることをつかみ、工作員を派遣した。工作員は、自分は党の工作員で敵の占領地区から工作活動の報告にきた、と名乗り、歩哨兵に「韓英浩は帰っていないのかね」と話しかけ、油断したところを銃を奪って逃走したのだ。

委員会から派遣されてきた魏拯民らは、韓英浩が敵に情報を漏らしている民生団だと思い込み、激しい拷問まで加えたようだ。韓は苦しまぎれに李相黙ら朝鮮人党員の名前を次々と民生団として挙げ、彼らは脱走するか、処刑されるかの運命をたどった。魏拯民が派遣されて当初は、粛清はさらに強化されたのである。

民生団事件と金日成

さて、この民生団事件の時期、金日成はどのような立場にいたのだろうか。この問題についてもっとも説得力のある記述をなしているのが、恵谷治氏の『金日成の真実』（毎日新聞社）である。金日成は当時汪清県の遊撃大隊政治委員であったが、幹部が次々と民生団事件で逮捕されるなか、当然彼も査問を受けた。恵谷氏は、一九三三年の戦闘で金日成が重傷を負った中国人の戦友を助けたこと、他にも金日成を民生団ではないとかばう中国人がいたこと、反民生団闘争の急先鋒だった党員、それも先に挙げた、朝鮮人の多数は民生団だと断じていた曹亜範とも親しかったことなどを挙げている。また、和田

春樹の著作から引用し、魏拯民自身も秘密報告で金日成のことを「一九三一年入党、勇敢積極、中国語を話せる。遊撃隊上がりである。民生団だという供述がすこぶる多い。隊員のなかで話をするのを好み、隊員中に信頼尊敬がある」と、民生団の疑いも記してはいるが、基本的に高く評価していることをうかがわせる。

また、金賛汀氏の「パルチザン挽歌」（御茶ノ水書房）にて紹介された、一九四二年に金日成自身が執筆しソ連に報告した「抗連第一路軍略史」に寄れば、金日成は中国共産党の指導に忠実に従い、闘争の第一目的は中国東北三省の日本からの奪回と中国革命だったと明言している。あえて言えば、金日成はこの時期民生団の疑いを受けて降格はされたものの、基本的には中国側に信頼された存在であり、また、まだ二一歳の「小物」だったこともあり難を逃れたのだろう。

しかし、私個人はある想像を禁じることができない。少なくとも当初は粛清の推進者だった側の人間たちからここまでの信頼や評価を受けているということは、金日成は、むしろ積極的な、彼らへの「支持者」もしくは「協力者」だった可能性はないのだろうか。そして、周囲の同志が次々と粛清され無慈悲に処刑されていく光景は、若き二十代初めの金日成に、権力というものは恐怖によって維持されること、周囲のライバルを「スパイ」の疑いをかけて殺していく技術、そのような恐ろしい発想を植えつけたのではないだろうか。そして、このとき中国側に取り入って難を逃れ、後には、ソ連の傀儡として朝鮮半島の支配者となった経緯は、その後の金日成にとってもっとも隠したい過去だったはずだ。それが、民生団事件は自らが解決し、また朝鮮半島は自らの軍が解放したという、朝鮮中級学校教科書に、そして北朝鮮の「金王朝史」の神話形成につながっていったのではないだろうか。

おそらく全容はいつか、中国共産党の秘密文書がすべて公開されたときに明らかとなろう。なお、現実の民生団事件は、朝鮮人党員、幹部約五〇〇名の犠牲の後、一九三五年三月、魏拯民自身も誤りを認め、朝鮮中級学校教科書にも紹介されている、大荒崴会議、腰営口会議等を経て、朝鮮人党員への不当な弾圧は否定され、また朝鮮独立運動も一定の正当な評価と位置づけをされることになった。しかし、もちろんこれらの会議に金日成は参加などしていない。若輩の彼に古参幹部を押しのけて会議に参加する権利などはなく、教科書による「國際党へ

の報告」は、魏拯民が一九三五年七月、コミンテルン大会に出席して現状報告を行っている。コミンテルンでの結論は民生団問題の解決、被疑者釈放、朝鮮人による武装部隊の創立、朝鮮解放のための統一戦線結成などだった。三六年二月に満州に戻った魏拯民は、まだ逮捕されていた民生団容疑者をすべて解放し、この事件にけりをつけた。

民生団の子供を哀れむ金日成？

さて、民生団事件について朝鮮中級学校教科書ではもう一箇所触れている。民生団と疑われた数十名の子供たちが、ぼろをまとい、飢え、寒さにこごえているのを見て、金日成がそれをあわれみ、自らの毛布をかけてやり、兵士たちに彼らを手厚く介護するよう命じたという話だ。はっきり言うが、こういうものを読むのはまことに精神衛生上悪い。

北朝鮮の子供たちは、孤児（コッチェビ）も含め、多く飢えと寒さのなかで死んでいった。金日成と金正日という二人の独裁者の悪政という「人災」での死者である。その現実はいまや多くの映像で見ることができるし、脱北者による貴重な証言にも事欠かない。それなのに、何故このような偽善的な記述がまかり通り、それが今もなお朝鮮中学校で教えられ続けているのか。

私は、教師たちも生徒たちも、このような教育をそのまま受け入れているとは思わない。一歩学校の外にでればまったく違う情報があふれているのだし、教師もこのような内容を本気で教えてはいないだろう。生徒たちも信じてはいないだろう。しかし私は、このような教科書が存在していることに、同じ民族として、少なくともこの日本では使うべきではない、内容を修正しようという声が朝鮮総連内部で、また在日知識人のなかで何故起こらないのだろうかと思う。

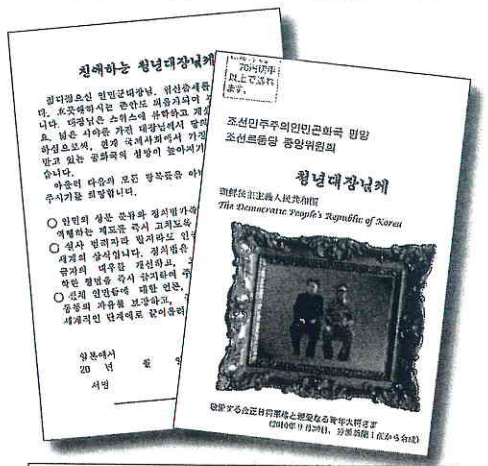
私が本稿を書く上で引用した、姜在彦氏、金賛汀氏は、いずれもかっては朝鮮総連系の知識人である。その方々が、九〇年代に自ら告発したのがこれらの著作だ。総連の方々は、この著作の存在を当然知っておられると思う。それでもかの教科書を、北朝鮮の指示のもとに使い続けなければならないのだろうか。先達たちの業績に敬意を払う気持ちもないのだろうか。

金賛汀氏は、あとがきにこう記している。京都で氏が講演した後、知人で、かっては総連幹部だった人物が近づいてきた。彼は氏の文章を読んだといった後、穿き捨てるように「あいつらウソばっかつきやがって！」と吐き捨てるように言ったという。金日成神話を信じていたこの人物のショックは大きく、またこの言葉は「虚構の歴史、捏造された歴史を信じた自分を罵る言葉でもあったのだろう」（「パルチザン挽歌」あとがき）。この本が書かれたのは一九九二年、守る会結成の二年前だった。姜在彦氏の「金日成神話の歴史的検証」は一九九七年である。

そして、この原稿を書いているときしばしば思い出されたのが、この二月、獄中で病死した連合赤軍の永田洋子のことだった。無実の同志を殺し続けた彼女の罪は重い。しかし、あえて言う。ある意味、抗日運動のなかで起きたリンチ殺害事件というべきこの民生団事件で殺されていった朝鮮人の数は、連合赤軍事件よりも遥かに多い。また、スターリンの粛清、ポルポトの虐殺、いや、金日成自身が政権を取り、収容所で殺していった人びとの数、そして金正日が餓死させた人びとの数は、永田洋子が殺した数など問題にならない。

歴史に横たわる無念の死者を、私たちはまだ重ね続けるのだろうか。

守る会が発行している“将軍様へのはがき”



（日本語翻訳）

親愛なる青年大将さまへ

若き人民軍大将さま、ご栄達をお慶び申し上げます。うるわしいご尊顔を拝することもでき、感激しております。大将さまはスイスに留学されていましたとのこと、広い視野を持つ大将さまが党の要職につかれることで現在国際社会の中で最低の評価を受けている共和国の声望が高まることを期待しております。

つきましては、以下の諸項目をお父上にご進言下さることを希望いたします。

- ●人民の成分分類や政治犯の家族連座制など時代に逆行する制度をただちに改めて下さい。
- ●たとえ犯罪者でも人権を保障するのが世界の常識です。政治犯をふくむすべての被拘禁者の待遇を改善し、拷問や奴隷労働、残虐な刑罰をただちに禁止してください。
- ●すべての人民に対し、言論・表現・信仰・経済活動などの自　由を保障し、共和国の人権水準を世界レベルまで引き上げて下さい。

20　年　　月　　日

日本から　　署名

かるめぎ №90号(2010年11月7日)「ふろく」から、詳しくお知りになりたい方は、守る会までご連絡を。